

ミチルの出番

ひゅう

青い闇をまっさかさまに落ちてゆく流れ星

ニムト星は、あいかわらず、強風が吹き荒れていたし、ハナニメ星も似たような風が吹いていた。

あるとき、ニムト星に隕石がぶつかって大災害が起きたのだった。ニムト星の住人の技術力をもってしてもなすすべもなく隕石がつぎつぎとなだれ込んでいく様子を見続けなければならなかった。

大勢の人が亡くなった。

行方不明のまま、消息をたつ人もいた。

ミチルはすでに、一度解体されて、すでに別の物として組み替えられていた。だからこの機械をミチルとよんでいいものか、判断しかねるが、それでも一番重要な処理をする回路はミチルをそのままつかっている。

開発したという女性科学者は現在は某国の研究員になっているらしい。美術作品と機械における越えがたい壁の研究をしているようだ。その壁はハンマーでこわれるのではないかと突如研究室の壁をぶちこわしたというおそろべきエピソードの持ち主である。

イグノイア星の若者はニムト星の彼らのために祈った。

1日もはやい復興を、と。

女性科学者は、言った。

「復興なんて、今日してしまえばいいじゃないか。食べ物がないところに食べ物が届けば、それもちいさな復興。屋根がないところに屋根の素材だけ届けばそれだって復興。昨日はふさぎ込んでいた気持ちがちょっと明るくなったのだから復興だよ」

青い闇の中、おおきなしっぽを持った、まるで幻のきつねのような流れ星が、隕石群にまぎれて流れていった。